



こころ
中

- 両親と私 -

夏目漱石



青空文庫



青空
文庫

宅^{うち}へ帰つて案外に思つたのは、父の元気がこの前見た時と大して変つていない事であつた。

「ああ帰つたかい。そうか、それでも卒業ができてまあ結構だつた。ちよつとお待ち、今顔を洗つて来るから」

父は庭へ出て何かしていたところであつた。古い^{むぎわらぼう}麦藁帽の後ろへ、日除^{ひよけ}のために括^{くく}り付けた薄汚^{うすぎた}ないハ

ンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻まわつて行つた。

学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私は、わたくしそれを予期以上に喜んでくれる父の前に恐縮した。

「卒業ができてまあ結構だ」

父はこの言葉を何遍なんべんも繰り返した。私は心のうちで

この父の喜びと、卒業式があつた晩先生の家の食卓うちで、

「お目出とう」といわれた時の先生の顔付かおつきとを比較し

た。私には口で祝つてくれながら、腹の底でけなして

いる先生の方が、それほどにもないものを珍しそうに嬉しがる父よりも、かえって高尚に見えた。私はしまいに父の無知から出る田舎臭いところいなかくさに不快を感じ出した。

「大学ぐらい卒業したって、それほど結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だってあります」
私はついにこんな口の利ききようをした。すると父が変な顔をした。

「何も卒業したから結構とばかりいうんじゃない。そりゃ卒業は結構に違いないが、おれのいうのはもう少

し意味があるんだ。それがお前に解わかつていてくれさえすれば、……」

私は父からその後を聞あとこうとした。父は話したくなさそうであつたが、とうとうこういつた。

「つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知つてる通りの病気だろう。去年の冬お前に会つた時、ことによるともう三月みつきか四月よつきぐらいなものだろうと思つていたのさ。それがどういふ仕しあわ合せか、今日までこうしている。起居たちいに不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉うれしいのさ。

せつかく丹精たんせいした息子が、自分のいなくなつた後あとで卒業してくるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいうれだろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、高たかが大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だといわれるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取つてより、このおれに取つて結構なんだ。解つたかい」

私は一言いちごんもなかつた。詫あやまる以上に恐縮うつつむして俯向うつむいていた。父は平気なうちに自分の死を覚悟していたも

のとみえる。しかも私の卒業する前に死ぬだろうと思
い定めていたとみえる。その卒業が父の心にどのくら
い響くかも考えずにいた私は全く愚かものであつた。

私は鞆かばんの中から卒業証書を取り出して、それを大事そ
うに父と母に見せた。証書は何かに押し潰つぶされて、元
の形を失っていた。父はそれを鄭寧ていねいに伸のした。

「こんなものは巻いたなり手に持つて来るものだ」

「中しんに心でも入れると好よかつたのに」と母も傍かたわらから注
意した。

父はしばらくそれを眺ながめた後あと、起たつて床とこの間の所へ

行つて、誰だれの目にもすぐはいるような正面へ証書を置いた。いつもの私ならすぐ何とかいはずであつたが、その時の私はまるで平生へいぜいと違つていた。父や母に対して少しも逆らう気が起らなかつた。私はだまつて父の為ながままに任せておいた。一旦いったん癖のついた鳥とりの子紙こがみの証書は、なかなか父の自由にならなかつた。適当な位置に置かれるや否いなや、すぐ己おのれに自然な勢いきおいを得て倒れようとした。

二

私わたくしは母を蔭かげへ呼んで父の病状を尋ねた。

「お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」

「もう何ともないようだよ。大方おおかた好くおなりなんだろう」

母は案外平気であった。都会から懸かけ隔たつた森や田の中に住んでいる女の常として、母はこういう事に

掛けてはまるで無知識であった。それにしてもこの前父が卒倒した時には、あれほど驚いて、あんなに心配したものを、と私は心のうちで独り異いな感じを抱いだいた。「でも医者はその時到底とてもむずかしいって宣告したじやありませんか」

「だから人間の身体からだほど不思議なものはないと思うんだよ。あれほどお医者が手重ておもくいったものが、今までしやんしやんしているんだからね。お母さんも始めのうちには心配して、なるべく動かさないようにと思つてたんだがね。それ、あの気性だろう。養生はしなざる

けれども、強情きやうじやうでねえ。自分が好いと思ひ込んだら、なかなか私わたしのいう事なんか、聞きそうにもなさらないんだからね」

私はこの前帰つた時、無理に床とこを上げさして、髭ひげを剃そつた父の様子と態度とを思ひ出した。「もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山きやうざん過ぎるからいけなないんだ」といつたその時の言葉を考えてみると、満更母まんざらばかり責める気にもなれなかつた。「しかし傍はたでも少しは注意しなくつちや」といおうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかつた。ただ父の病やまいの性質につい

て、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。しかしその大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかつた。母は別に感動した様子も見せなかつた。ただ「へえ、やつぱり同じ病おんな気でね。お気の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方かたは」などと聞いた。

私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かつた。父は私の注意を母よりは真ま面目じめに聞いてくれた。「もつともだ。お前のいう通りだ。けれども、己おれの身体からだは必竟ひつきよう己の身体で、その己の身体についての養生法は、多年の経験上、己が一番能よく心得て

いるはずだからね」といった。それを聞いた母は苦笑した。「それご覧な」といった。

「でも、あれでお父さんは自分でちやんと覚悟だけはしているんですよ。今度私が卒業して帰ったのを大変喜んでいるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業はできまいと思つたのが、達者なうちに免状を持って来たから、それが嬉しいんだって、お父さんは自分でそういつていましたぜ」

「そりゃ、お前、口でこそそうおいだけどもね。お腹のなかではまだ大丈夫だと思つてお出のだよ」

「それでしょうか」

「まだまだ十年も二十年も生きる気でお出のだよ。もつとも時々わたしにも心細いような事をおいだがね。おれもこの分じやもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はとうする、一人でこの家うちにいる気かなんて」

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家いなかやを想像して見た。この家いえから父一人を引き去つた後あとは、そのまま立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何というだろうか。そう

考える私はまたこの土を離れて、東京で気楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫でいるうちに、分けて貰うもらものは、分けて貰って置けという注意を、偶然思い出した。

「なにね、自分で死ぬ死ぬっていう人に死んだ試ためしはないんだから安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬっていいながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙ってる丈夫の人の方が剣呑けんおんさ」

私は理屈から出たとも統計から来たとも知れない、

この陳腐^{ちんぷ}なような母の言葉を黙然^{もくねん}と聞いていた。

三二

私わたくしのために赤い飯めしを炊たいて客をするという相談が父と母の間起つた。私は帰つた当日から、あるいはこんな事になるだろうと思つて、心のうちで暗あんにそれを恐れていた。私はすぐ断わつた。

「あんまり仰山ぎやうざんな事は止よしてください」

私は田舎いなかの客が嫌いだった。飲んだり食つたりするのを、最後の目的としてやって来る彼らは、何か事が

あれば好いといつた風の人ばかり揃そろっていた。私は子供の時から彼らの席に待じするのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛はいつそう甚はなはだしいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野鄙やひな人を集めて騒ぐのは止せともいいかねた。それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した。

「仰山仰山とおいいだが、些ちっとも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするの当り前だよ。そう遠慮をお為しでない」

母は私が大学を卒業したのを、ちようど嫁でも貰もらつたと同じ程度に、重く見ているらしかった。

「呼ばなくつても好いいが、呼ばないとまた何とかいうから」

これは父の言葉であつた。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分たちの予期通りにならないと、すぐ何とかいいたがる人々であつた。「東京と違って田舎は蒼蠅うるさいからね」

父はこうもいった。

「お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加え

た。

私は我^がを張る訳にも行かなかつた。どうでも二人の都合の好^いようにしたらと思ひ出した。

「つまり私のためなら、止^よして下さいというだけなんです。陰で何かいわれるのが厭^{いや}だからというご主意^{しゅい}なら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事を私が強いて主張したつて仕方ありません」

「そう理屈をいわれると困る」

父は苦い顔をした。

「何もお前のためにするんじゃないとお父さんがおつ

しやるんじゃないけれども、お前だつて世間への義理ぐらいは知つてゐるだらう」

母はこうなると女だけにしどろもどろな事をいつた。その代り口数からいうと、父と私を二人寄せてもなかなか敵^{かな}うどころではなかつた。

「学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなつていけない」

父はただこれだけしかいわなかつた。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平生^{へいぜい}から私に対してもつてゐる不平の全体を見た。私はその時自分の言葉使

の角張かどばつたところに気が付かずに、父の不平の方ばかりを無理のように思った。

父はその夜よまた気を更かえて、客を呼ぶなら何日いつにするかと私の都合を聞いた。都合の好いいも悪いいもなしにただぶらぶら古い家の中に寝起ねおきしている私に、こんな問いを掛けるのは、父の方が折れて出たのと同じ事であつた。私はこの穏やかな父の前に拘泥こだわらない頭を下さげた。私は父と相談の上招待しょうだいの日取りを極きめた。

その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起つた。それは明治天皇めいじてんのうのご病気の報知であつた。新

聞紙ですぐ日本中へ知れ渡つたこの事件は、一軒の
田舎家のうちに多少の曲折を経てようやく纏まとまろうと
した私の卒業祝いを、塵ちりのごとくに吹き払つた。

「まあ、ご遠慮申した方がよかろう」

眼鏡めがねを掛けて新聞を見ていた父はこういつた。父は
黙つて自分の病気の事も考えているらしかった。私は
ついこの間の卒業式に例年の通り大学へ行幸ぎょうこうになつた
陛下おもを憶い出したりした。

四

小勢こぜいな人数にんずには広過ぎる古い家がひっそりしている中に、私は行李わたくしこうりを解いて書物を繙ひもとき始めた。なぜか私は気が落ち付かなかつた。あの目眩めまぐるしい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁ページを一枚一枚にまくって行く方が、気に張りがあつて心持よく勉強ができた。

私はややともすると机にもたれて仮寝うたたねをした。時に

はわざわざ枕まくらさえ出して本式に昼寝を貪むさぼる事もあつた。眼が覚めると、蟬せみの声を聞いた。うつつから続いていようなその声は、急に八釜やかましく耳の底を搔かき乱した。私は凝じつとそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸むねに抱いだいた。

私は筆を執とつて友達のだれかれに短い端書はがきまたは長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残っていた。あるものは遠い故郷に帰っていた。返事の来るのも、音信たよりの届かないのもあつた。私は固もとより先生を忘れなかつた。原稿紙へ細字さいじで三枚ばかり国へ帰つて

から以後の自分というようなものを題目にして書き綴つづつたのを送る事にした。私はそれを封ふうじる時、先生ははたしてまだ東京にいるだろうかうたぐと疑うたぐつた。先生が奥さんといつしよに宅うちを空あける場合には、五十恰好がっこうの切下きりさげの女の人きりさげがどこからか来て、留守番をするのが例れいになつていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類と思ひ違えていた。先生は「私には親類はありませんよ」と答えた。先生の郷里きょうりにいる続きつづきあいの人々と、先生は一向いっこう音信の取り遣とりやりををし

ていなかかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚しんせきであつた。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽に後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行つたあとへこの郵便が届いたら、あの切下のお婆ばあさんは、それをすぐ転地先へ送つてくれるだけの気転と親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれというほどの必要の事も書いてないのを、私は能く承知よしていた。ただ私は淋さびしかつた。そうして先生から返事の来るのを予期し

てかかった。しかしその返事はついに来なかつた。

父はこの前の冬に帰つて来た時ほど将棋しょうぎを差したが
らなくなつた。将棋盤はほこりの溜たまつたまま、床とこの間ま
の隅に片寄せられてあつた。ことに陛下のご病気以後
父は凝じつと考え込んでいるように見えた。毎日新聞の来
るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ。それから
その読よみがらをわざわざ私のいる所へ持つて来てくれた。
「おいご覧、今日も天子さまの事が詳しく出ている」
父は陛下のことを、つねに天子さまといつていた。
「勿もつたい体ない話だが、天子さまのご病気も、お父さんのと

まあ似たものだろうな」

こういふ父の顔には深い掛念けねんの曇りくもがかかっていた。こういわれる私の胸にはまた父がいつ斃たおれるか分らないという心配がひらめいた。

「しかし大丈夫だろう。おれのような下くだらないものでも、まだこうしていられるくらいだから」

父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己おのれに落ちかかって来そうな危険を予感しているらしかった。

「お父さんは本当に病気を怖こわがつてるんですよ。お母

さんのおっしやるように、十年も二十年も生きる気
じやなさそうですぜ」

母は私の言葉を聞いて当惑そうな顔をした。

「ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」

私は床の間から将棋盤を取りおろして、ほこりを拭
いた。

五

父の元氣は次第に衰えて行つた。私を驚かせたハンケチ付きの古い麦藁帽子むぎわらぼうしが自然と閑却かんきやくされるようになった。私は黒い煤すすけた棚の上に載のつているその帽子を眺ながめるたびに、父に対して氣の毒な思ひをした。父が以前のようにならなかつた。軽々と動く間は、もう少し慎つつしんでくれたらと心配した。父が凝じつと坐すわり込むようになると、やはり元の方が達者だつたのだという氣が起つた。私

は父の健康についてよく母と話し合った。

「まったく気のせいだよ」と母がいった。母の頭は陛下の病やまいと父の病とを結び付けて考えていた。私にはそうばかりとも思えなかつた。

「気じゃない。本当に身体からだが悪くないんでしよるか。どうも気分より健康の方が悪くなつて行くらしい」

私はこういつて、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。

「今年の夏はお前も詰つまらなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事ができず、お父さんの

身体からだもあの通りだし。それに天子様のご病気で。――

いつその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かったんだよ」

私が帰つたのは七月の五、六日で、父や母が私の卒業を祝うために客を呼ぼうといひだしたのは、それから一週間後ごであつた。そうしていよいよと極きめた日はそれからまた一週間の余も先になつていた。時間に束縛かを許さない悠長な田舎いなかに帰つた私は、お蔭かげで好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であつたが、私を理解しない母は少しもそこに気が付いていないら

しかつた。

ほうぎよ

崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「ああ、ああ」といった。

「ああ、ああ、天子様もとうとうおかくれになる。己も

おれ

……」

父はその後をあとをいわなかつた。

私は黒いうすものを買うために町へ出た。それで

はたざお

たま

旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅ずんはばのひらひ

らを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと

下がった。私の宅うちの古い門の屋根は藁わらで葺ふいてあつた。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹ところどころでこぼこさえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地じと、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺ながめた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣だいぶんが違っていますかね」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもあつ

た。また先生に見せるのが恥ずかしくもあつた。

私はまた一人家のなかへはいつた。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなつた都会の、不安でざわざわしているなかに、一点の燈火のごとくに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦うずの中に、自然と捲まき込まれている事に気が付かなかつた。しばらくすれば、その灯ひも

またふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えて
いるのだとは固もとより気が付かなかつた。

私は今度の事件について先生に手紙を書こうかと
思つて、筆を執とりかけた。私はそれを十行ばかり書い
て已やめた。書いた所は寸すん々に引き裂いて屑籠くずかごへ投げ込
んだ。(先生に宛あててそういう事を書いてでも仕方がな
いとも思つたし、前例に徴ちようしてみると、とても返事を
くれそうになかつたから)。私は淋さびしかつた。それで
手紙を書くのであつた。そうして返事が来れば好いいと
思うのであつた。

六

八月の半なかばごろになつて、私わたくしはある朋友ほうゆうから手紙を受け取つた。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあつた。この朋友は経済の必要上、自分でそんな位地を探し廻まわる男であつた。この口も始めは自分の所へかかつて来たのだが、もつと好いい地方へ相談ができたので、余つた方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであつた。私はすぐ返事を

出して断った。知り合いの中には、ずいぶん骨を折つて、教師の職にありつきたがつていているものがあるから、その方へ廻まわしてやったら好よかろうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異存はないようであつた。

「そんな所へ行かないでも、まだ好いい口があるだろう」
こういつてくれる裏に、私は二人が私に対してもつてゐる過分な希望を読んだ。迂闊うかつな父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待してゐるらしかつたのである。

「相当の口って、近頃ちかごろじゃそんな旨い口うまはなかなかあるものじゃありません。ことに兄さんと私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」

「しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行ってくれなくっちゃこつちも困る。人からあなたの所じなんのご二男は、大学を卒業なすって何をしてお出いでですかと聞かれた時に返事ができないようじゃ、おれも肩身が狭いから」

父は洩面しゅうめんをつくつた。父の考えは、古く住み慣れた

郷里から外へ出る事を知らなかつた。その郷里の誰彼だれかれから、大学を卒業すればいくらぐらい月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円ぐらいなものだろうかといわれたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかつたのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体きたいな人間に異ならなかつた。私の方でも、実際そういう人間のような気持を折々起した。私はあからさまに自分の考えを打ち明けけるには、あまりに距離の懸隔けんかくの甚はなはだし

い父と母の前に默然もくねんとしていた。

「お前のよく先生先生という方にでもお願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」

母はこうより外ほかに先生を解釈する事ができなかつた。その先生は私に国へ帰つたら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であつた。卒業したから、地位の周旋をしてやろうという人ではなかつた。

「その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。

「何にもしていないんです」と私が答えた。

私はとくの昔から先生の何もしていないという事を

父にも母にも告げたつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶しているはずであった。

「何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっつていそうなものだがね」

父はこういつて、私を諷ふうした。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必竟ひつじやうやくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。

「おれのような人間だって、月給こそ貰つちやいない

が、これでも遊んでばかりいるんじゃない」

父はこうもいった。私はそれでもまだ黙っていた。

「お前のいうような偉い方なら、きつと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。

「いいえ」と私は答えた。

「じゃ仕方がないじゃないか。なぜ頼まないんだい。手紙でも好いいからお出しな」

「ええ」

私は生返なまへんじ事をして席を立った。

七

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者
の来るたびに蒼蠅うるさい質問を掛けて相手を困らす質たちでも
なかった。医者の方でもまた遠慮して何ともいわな
かった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも
自分がいなくなつた後あとのわが家いえを想像して見るらし
かった。

「小供こどもに学問をさせるのも、好よし悪あしだね。せつかく修業をさせると、その小供は決して宅うちへ帰つて来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するため学問させるよ
うなものだ」

学問をした結果兄は今遠国えんごくにいた。教育を受けた因果で、私わたくしはまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴ぐちはもとより不合理ではなかつた。永年住み古した田舎家いなかやの中に、たった一人取り残され
そんな母を描えがき出す父の想像はもとより淋さびしいに違ちがひ
なかつた。

わが家は動かす事のできないものと父は信じ切つていた。その中に住む母もまた命のある間は、動かす事のできないものと信じていた。自分が死んだ後、この孤独な母を、たつた一人伽藍堂がらんどうのわが家に取り残すのもまた甚だしい不安であつた。それなのに、東京で好い地位を求めろといつて、私を強いたがる父の頭には矛盾があつた。私はその矛盾をおかしく思つたと同時に、そのお蔭かげでまた東京へ出られるのを喜んだ。

私は父や母の手前、この地位をできるだけの努力で求めつつあるごとくに装おわなくてはならなかつた。

私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力でできる事があつたら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思ひながらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事もできまいと思ひながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いた。

私はそれを封じて出す前に母に向かつていった。

「先生に手紙を書きましたよ。あなたのおつしやつた

通り。ちよつと読んでご覧なさい」

母は私の想像したごとくそれを読まなかつた。

「そうかい、それじゃ早くお出し。そんな事は他ひとが気を付けなくても、自分で早くやるものだよ」

母は私をまだ子供のように思っていた。私も實際子供のような感じがした。

「しかし手紙じゃ用は足りませんよ。どうせ、九月にでもなつて、私が東京へ出てからでなくつちや」

「そりやそうかも知れないけれども、またひよつとして、どんな好いい口がないとも限らないんだから、早く

頼んでおくに越した事はないよ」

「ええ。とにかく返事は来るに極きまってますから、そうしたらまたお話ししましょう」

私はこんな事に掛けて几帳面きちょうめんな先生を信じていた。

私は先生の返事の来るのを心待ちに待った。けれども私の予期はついに外はずれた。先生からは一週間経たつても何の音信たよりもなかった。

「大方おおかたどこかへ避暑びんすにでも行っているんでしよう」

私は母に向かつて言訳いいわけらしい言葉を使わなければならなかった。そうしてその言葉は母に対する言訳ばかり

りでなく、自分の心に対する言訳でもあつた。私は強
いても何かの事情を仮定して先生の態度を弁護しなけ
れば不安になつた。

私は時々父の病気を忘れた。いつそ早く東京へ出て
しまおうかと思つたりした。その父自身もおのれの病
気を忘れる事があつた。未来を心配しながら、未来に
対する所置は一向取らなかつた。私はついに先生の忠
告通り財産分配の事を父にいい出す機会を得ずに過ぎ
た。

八

九月始めになつて、私はいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向かつて当分今まで通り学資を送つてくれるように頼んだ。

「ここにこうしていたつて、あなたのおつしやる通りの地位が得られるものじゃないですから」

私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事をいった。

「無論口の見付かるまでで好いですから」ともいった。

私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。

「そりやわずかの間の事あいだだろうから、どうにか都合してやろう。その代り永くはいけないよ。相当の地位を得え次

第独立しなくつちや。元来学校を出た以上、出たあくひとる日から他の世話になんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」

父はこの外にもまだ色々な小言をいつた。その中には、「昔の親は子に食わせてもらつたのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があつた。それらを私はただ黙つて聞いていた。

小言が一通り済んだと思つた時、私は静かに席を立つとうとした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好かつた。

「お母さんに日を見てもらいなさい」

「そうしましょう」

その時の私は父の前に存外おとなしかつた。私はな

るべく父の機嫌に逆らわずに、田舎を出ようとした。

父はまた私を引き留めた。

「お前が東京へ行くと宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないともいえないよ」

私はできるだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐つて、心細そうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこの間中

聞いたのと違つて、つくつく法師ほうしの声であつた。私は夏郷里に帰つて、煮え付くような蝉の声の中に凝じつと坐つていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあつた。私の哀愁はいつもこの虫の烈はげしい音ねと共に、心の底に沁しみ込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていた。

私の哀愁はこの夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蟬の声がつくつく法師の声に変わるごとくに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻りんねのうちに、そろそろ動いているように思われた。私は淋さびしそうな父の

態度と言葉を繰り返しながら、手紙を出しても返事を
寄こさない先生の事をまた憶いおも浮べた。先生と父とは、
まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上
にも、連想の上にも、いつしよに私の頭に上りのぼやす
かった。

私はほとんど父のすべでも知り尽つくしていた。もし父
を離れるとすれば、情合じょうあひの上に親子の心残りがあるだ
けであつた。先生の多くはまだ私に解わかつていなかつた。
話すと約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ず
にいた。要するに先生は私にとって薄暗かつた。私は

ぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかつた。先生と関係の絶えるのは私にとって大いな苦痛であつた。私は母に日を見てもらつて、東京へ立つ日取りを極^きめた。

九

私わたくしがいよいよ立とうという間際になって、（たしか二日前の夕方の事であつたと思うが）父はまた突然引ひつ繰くり返かえつた。私はその時書物や衣類を詰めた行李こうりをからげていた。父は風呂ふろへ入つたところであつた。

父の背中を流しに行つた母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸体はだかのまま母に後ろから抱かれています父を見た。それでも座敷へ伴つれて戻つた時、父はもう大丈

夫だといった。念のために枕元まくらもとに坐すわつて、濡手拭ぬれてぬぐいで父の頭を冷ひやしていた私は、九時頃ごころになつてようやく形かたばかりの夜食を済しました。

翌日よくじつになると父は思ったより元気が好よかつた。留とめるのも聞かずに歩いて便所へ行つたりした。

「もう大丈夫」

父は去年の暮倒れた時に私に向かつていったと同じ言葉をまた繰り返した。その時ははたして口でいった通りまあ大丈夫であつた。私は今度もあるいはそうなるかも知れないと思つた。しかし医者はまだ用心が肝

要だと注意するだけで、念を押しても判然はつきりした事を話してくれなかった。私は不安のために、出立しゅったつの日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかった。

「もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。

「そうしておくれ」と母が頼んだ。

母は父が庭へ出たり背戸せどへ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉もんだりした。

「お前は今日東京へ行くはずじゃなかったか」と父が

聞いた。

「ええ、少し延ばしました」と私が答えた。

「おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちよつと躊躇ちゆうちゆうした。そうだといえ、父の病氣

の重いのを裏書きするようなものであつた。私は父の神経を過敏にしたくなかつた。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかつた。

「気の毒だね」といつて、庭の方を向いた。

私は自分の部屋にはいつて、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出しても差支さしつかえないよう

に、堅く括くくられたままであつた。私はぼんやりその前に立って、また縄を解こうかと考えた。

私は坐つたまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また三、四日を過ぎした。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥あんがを命じた。

「どうしたものだろうね」と母が父に聞こえないような小さな声で私にいった。母の顔はいかにも心細そうであつた。私は兄と妹いもとに電報を打つ用意をした。けれども寝ている父にはほとんど何の苦悶くもんもなかつた。話をするところなどを見ると、風邪かぜでも引いた時と全く

同じ事であつた。その上食欲は不断よりも進んだ。傍ほとのもの、注意しても容易にいう事を聞かなかつた。「どうせ死ぬんだから、旨うまいものでも食つて死ななくつちや」

私には旨いものという父の言葉が滑稽こっけいにも悲酸ひさんにも聞こえた。父は旨いものを口に入れられる都には住んでいなかったのである。夜よに入いつてかき餅もちなどを焼いてもらつてぼりぼり嚙かんだ。

「どうしてこかわう渴かわくのかね。やつぱり心しんに丈夫の所があるのかも知れないよ」

母は失望していいところにかえつて頼みを置いた。

そのくせ病気の時にしか使わない渴くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。

伯父^{おじ}が見舞に来たとき、父はいつまでも引き留めて帰さなかつた。淋^{さむ}しいからもつといてくれというのが重^{おも}な理由であつたが、母や私が、食べたいだけ物を食べさせないという不平を訴えるのも、その目的の一つであつたらしい。

十

父の病気は同じような状態で一週間以上つづいた。

わたくし

私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛あてで出した。妹いもと

へは母から出させた。私は腹の中で、おそらくこれが

父の健康に関して二人へやる最後の音信たよりだろうと思つ

た。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めた。

兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから

父の危険が眼の前に逼せまらないうちに呼び寄せる自由は利きかなかつた。といつて、折角都合して来たには来たが、間まに合わなかつたといわれるのも辛つらかつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。

「そう判然はつきりした事になると私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承知して置いて下さい」

ステーション
停車場のある町から迎えた医者には私にこういった。

私は母と相談して、その医者の周旋で、町の病院から

看護婦を一人頼む事にした。父は枕元まくらもとへ来て挨拶あいさつする
白い服を着た女を見て変な顔をした。

父は死病に罹かかつていている事をとうから自覚していた。
それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには氣
が付かなかつた。

「今に癒なおつたらもう一返いっぺん東京へ遊びに行つてみよう。
人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事
は、生きてるうちにやっておくに限る」

母は仕方なしに「その時は私もいつしよに伴つれて
行つて頂きましょう」などと調子を合せていた。

時とするとまた非常に淋さみしがった。

「おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」

私はこの「おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもっていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かって何遍なんべんもそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であった。私は笑わらいを帯びた先生の顔と、縁喜えんぎでもない^と耳を塞ふさいだ奥さんの様子とを憶おもい出した。あの時の「おれが死んだら」は単純な仮定であった。今私が聞くのはいつ起るか分らない事実であった。

私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事ができなかつた。しかし口の先では何とか父を紛らさなければならなかつた。

「そんな弱い事をおつしやつちやいけませんよ。今に癒なおつたら東京へ遊びにいらつしやるはずじゃありませんか。お母さんといつしよに。今度いらつしやるときつと吃驚びっくりしますよ、変っているんで。電車の新しい線路だけでも大變増ふえていますからね。電車が通るよまちなみうになれば自然町並まちなみも変わるし、その上に市区改正もあにろくじちゆうるし、東京が凝じつとしている時は、まあ二六時中一分も

ないといつていいくらいです」

私は仕方がないからいわないでいい事まで喋舌しゃべつた。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。

病人があるので自然家いえの出入りも多くなつた。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらいの割で代る代る見舞に来た。中には比較的遠くにいて平生疎遠へいぜいなものもあつた。「どうかと思つたら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘠やせていないじゃないか」などといつて帰るものがあつた。私の帰つた当時はひっそりし過ぎるほど静かであつた家庭が、こ

んな事で段々ざわざわし始めた。

その中に動かずにいる父の病気は、ただ面白くない方へ移つて行くばかりであつた。私は母や伯父おじと相談して、とうとう兄と妹いもとに電報を打つた。兄からはすぐ行くという返事が来た。妹の夫からも立つという報知しらせがあつた。妹はこの前懐妊かいにんした時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねていい越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかつた。

十一

こうした落ち付きのない間にも、私はまだ静かに坐すわる余裕をもっていた。偶たまには書物を開けて十頁ページもつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦いったん堅く括くくられた私の行李こうりは、いつの間にか解かれてしまった。私は要いるに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極きめた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三さんが一いちにも足ら

なかつた。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思った通り仕事の運ばない例も少なかつた。ためしこれが人の世の常だろうと思ひながら私は厭いやな気持ちに抑おさえ付けられた。

私はこの不快の裏うちに坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後あとの事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に地位、教育、性格の全然異なつた二人の面影を眺ながめた。

私が父の枕元まくらもとを離れて、独り取り乱した書物の中に

腕組みをしているところへ母が顔を出した。

「少し午眠ひるねでもおしよ。お前もさぞ草臥くたびれるだろう」

母は私の気分を了解していなかった。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかった。私は単簡たんかんに礼を述べた。母はまだ室へやの入口に立っていた。

「お父さんは？」と私が聞いた。

「今よく寝てお出いでだよ」と母が答えた。

母は突然はいつて来て私の傍そばに坐すわった。

「先生からまだ何ともいつて来ないかい」と聞いた。

母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は

先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかつた。私は心得があつて母を欺いたあやむと同じ結果に陥つた。

「もう一遍いっぺん手紙を出してご覧な」と母がいつた。

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭いとうような私ではなかつた。けれどもこういう用件で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱しかられたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遥はるかに恐れていた。

あの依頼に対して今まで返事の貰えないのも、あるいはそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた。「手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒らちは明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼んで廻まわらなくっちゃ」

「だってお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか分らないじゃないか」

「だから出やしません。癒なおるとも癒らないとも片付かないうちは、ちゃんとこうしているつもりです」

「そりゃ解わかり切った話だね。今にもむずかしいという

大病人を放ち^{ほう}らかして置いて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐^{あわ}れんだ。しかし母がなぜこんな問題をこのざわざわした際に持ち出したのか理解できなかつた。私が父の病気をよそに、静かに坐つたり書見したりする余裕のあるごとくに、母も眼の前の病人を忘れて、外^{ほか}の事を考えるだけ、胸^{すきま}に空地があるのかしらと疑^{うたぐ}つた。その時「実はね」と母がいい出した。

「実はお父さんの生きてお出^{いで}のうち、お前の口が

極きま

つたらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥たしかなら気も慥かなんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」

憐れな私は親孝行のできない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかつた。

十二

兄が帰つて来た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生へいぜいから何を措おいても新聞だけには眼を通す習慣であつたが、床とこについてからは、退屈のため猶更なおさらそれを読みたがつた。母も私わたくしも強しいては反対せず、なるべく病人の思い通りにさせておいた。

「そういう元気なら結構なものだ。よつぽど悪いかと思つて来たら、大変好いいようじゃありませんか」

兄はこんな事をいいながら父と話をした。その賑にぎやか過ぎる調子が私にはかえって不調和に聞こえた。それでも父の前を外はずして私と差し向いになった時は、むしろ沈んでいた。

「新聞なんか読ましちやいけなかないか」

「私わたしもそう思うんだけど、読まないと承知しないんだから、仕様がなない」

兄は私の弁解を黙って聞いていた。やがて、「よく解わかるのかな」といった。兄は父の理解力が病気のために、平生よりはよっぽど鈍にぶっているように観察したらしい。

「そりや慥たしかです。私はさつき二十分ばかり枕元まくらもとに坐すわつて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもないです。あの様子じやことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」

兄と前後して着いた妹いもの夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的であつた。父は彼に向かつて妹の事をあれこれと尋ねていた。「身体からだが身体だからむやみに汽車になんぞ乗つて揺ゆれない方が好い。無理をして見舞に來られたりすると、かえつてこつちが心配だから」といつていた。「なに今に治つたら赤ん坊の顔でも見に、

久しぶりにこつちから出掛けるから差支さしつかえない」とも
いつていた。

乃木大將のぎだいしょうの死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれ
を知った。

「大変だ大変だ」といった。

何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされ
た。

「あの時はいよいよ頭が変になったのかと思つて、ひ
やりとした」と後で兄が私にいった。「私もわたし実は驚き
ました」と妹の夫も同感らしい言葉つきであつた。

その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりあつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧ていねいにそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へやへ持つて来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女かんじよみたような服装なりをしたその夫人の姿を忘れる事ができなかつた。

悲痛な風が田舎の隅さかいちゆうまで吹いて来て、眠たそうな樹きや草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取つた。洋服を着た人を見ると犬ほが吠える

ような所では、一通の電報すら大事件であつた。それを受け取つた母は、はたして驚いたような様子をして、わざわざ私を人のいない所へ呼び出した。

「何だい」といって、私の封を開くのを傍そばに立つて待つていた。

電報にはちよつと会いたいが来られるかという意味が簡単に書いてあつた。私は首を傾けた。

「きつとお頼たのもうしておいた口の事だよ」と母が推断してくれた。

私もあるいはそうかも知れないと思つた。しかしそ

れにしては少し変だとも考えた。とにかく兄や妹いもの夫まで呼び寄せた私が、父の病気を打遣うちやつて、東京へ行く訳には行かなかつた。私は母と相談して、行かれないという返電を打つ事にした。できるだけ簡略な言葉で父の病気の危篤きとくに陥りつつある旨むねも付け加えたが、それでも気が済まなかつたから、委細いさい手紙として、細かい事情をその日のうちに認したためて郵便で出した。頼んだ位地の事とばかり信じ切つた母は、「本当に間まの悪い時は仕方のないものだね」といつて残念そうな顔をした。

十三

わたくし

私の書いた手紙はかなり長いものであつた。母も私も今度こそ先生から何とかいって来るだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛あてで届いた。それには来ないでもよろしいという文句だけしかなかつた。私はそれを母に見せた。

おおかた

「大方手紙で何とかいってきて下さるつもりだろうよ」
母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋し

てくれるものとはばかり解釈しているらしかった。私も
あるいはそうかとも考えたが、先生の平生から推^おして
みると、どうも変に思われた。「先生が口を探してくれ
る」。これはあり得^うべからざる事のように私には見え
た。

「とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだ
から、この電報はその前に出したものに違いないです
ね」

私は母に向かつてこんな分り切った事をいった。母
はまたもつともらしく思案しながら「そうだね」と答

えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打つたという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているのに。

その日はちようど主治医が町から院長を連れて来るはずになつていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかつた。二人の医者^は立ち合^ひいの上、病人^{かんちよう}に浣腸^{かんちよう}などをして帰つて行つた。

父は医者^{ひと}から安臥^{あんが}を命ぜられて以来、両便とも寝たまま他の手^{ひと}で始末^{はなは}してもらつていた。潔癖^{けつぺき}な父は、最初の間^まこそ甚^{はなは}だしくそれを忌^いみ嫌^{きら}つたが、身体^{からだ}が利^きか

ないので、やむを得ずいやいや床とこの上で用を足した。それが病気の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経るふに従つて、無精な排泄はいせつを意としないようになった。たまには蒲団ふとんや敷布を汚して、傍はたのものが眉まゆを寄せるのに、当人はかえつて平気でいたりした。もつとも尿の量は病気の性質として、極めて少なくなつた。医者はそのを苦しめた。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがつても、舌が欲しがらるだけで、咽喉のどから下へはごく僅わずかしか通らなかつた。好きな新聞も手に取る気力がなくなつた。枕まくらの傍そばにある老眼鏡ろうがんきょうは、い

つまでも黒い鞆さやに納められたままであつた。子供の時分から仲の好かつた作さんさくという今では一里りばかり隔たつた所に住んでいる人が見舞に来た時、父は「ああ作さんか」といって、どんよりした眼を作さんの方に向けた。

「作さんよく来てくれた。作さんは丈夫うらやで羨ましいね。己おれはもう駄目だめだ」

「そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業するし、少しぐらい病気になつたつて、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるしさ、

子供はなしさ。ただこうして生きていくだけの事だよ。達者だつて何の楽しみもないじゃないか」

かんちよう

浣腸をしたのは作さんが来てから二、三日あとの事

であつた。父は医者のお蔭かげで大変楽になつたといつて

喜んだ。少し自分の寿命に対する度胸ができたという

風ふうに機嫌が直つた。傍そばにいる母は、それに釣り込まれ

たのか、病人に気力を付けるためか、先生から電報の

きた事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京

にあつたように話した。傍そばにいる私はむずがゆい心持

がしたが、母の言葉を遮おさえる訳にもゆかないので、黙つ

て聞いていた。病人は嬉しうれいそうな顔をした。

「そりや結構です」と妹いもとの夫もいった。

「何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。

私は今更それを否定する勇気を失った。自分にも何とも訳あいまいの分らない曖昧な返事をして、わざと席を立つた。

十四

父の病気は最後の一撃を待つ間際まで進んで来て、
そこでしばらく躊躇ちゆうちゆうするようにみえた。家のものは運
命の宣告が、今日下くだるか、今日下るかと思つて、毎夜
床とこにはいつた。

父は傍はたのものを辛つらくするほどの苦痛をどこにも感じ
ていなかった。その点になると看病はむしろ楽であつ
た。要心のために、誰か一人ぐらいつつ代る代る起き

てはいたが、あとのものは相当の時間に各自めいめいの寢床へ引き取つて差支さしつかえなかつた。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸うなるような声を微かすかに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍べん半夜よなかに床を抜け出して、念のため父の枕元まくらもとまで行つてみた事があつた。その夜よは母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横ひじに肱うぢを曲げて枕としたなり寢入つていた。父も深い眠りの裏うちにそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といつしよの蚊帳かやの中に寢た。妹いもの夫とこだけは、

客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入いって休んだ。

「関せきさんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくつちやあ」

関というのはその人の苗字みょうじであつた。

「しかしそんな忙しい身体からだでもないんだから、ああして泊とっていてくれるんでしよう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなつちや」

「困こつても仕方がない。外ほかの事と違ちがうからな」

兄とこと床とこを並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄

の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあつた。どうせ助からないものならばという考えもあつた。我々は子として親の死ぬのを待つているよ
うなものであつた。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表示すのを憚はばかつた。そうしてお互いにお互いがどんな事を思つてゐるかをよく理解し合つていた。「お父さんは、まだ治る氣でゐるようだな」と兄が私に
いつた。

実際兄のいう通りに見えるところもないではなかつた。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うといつ

て承知しなかった。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事ができなかつたのを残念がった。その代り自分の病気が治つたらというような事も時々付け加えた。

「お前の卒業祝いは已^やめになつて結構だ。おれの時には弱つたからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコールに煽^{あお}られたその時の乱雑な有様を想^{おも}い出して苦笑した。飲むものや食うものを強^しいて廻^{まわ}る父の態度も、にがにがしく私の眼に映つた。

私たちは好^よく喧嘩^{けんか}をして、年の少ない私の方がいつで

も泣かされた。学校へはいつてからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺めて、常に動物的だと思っていた。私は長く兄に会わなかったので、また懸け隔たった遠くにいたので、時からいつでも距離からいつても、兄はいつでも私には近くなかったのである。それでも久しぶりにこう落ち合ってみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因になった。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕元で、

兄と私は握手したのであった。

「お前これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違った質問を兄に掛けた。

「一体家の財産はうちどうなってるんだらう」

「おれは知らない。お父さんはまだ何ともいわないから。しかし財産っていったところで金としては高たかの知れたものだらう」

母はまた母で先生の返事の来るのを苦にしていた。

「まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。

十五

「先生先生というのは一体誰だれの事ことだい」と兄が聞いた。「こないだ話したじゃないか」と私わたくしは答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他ひとの説明を忘れてしまふ兄に対して不快の念を起した。

「聞いた事は聞いたけれども」

兄は必竟ひっきよう聞いても解わからないというのであつた。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解してもらふ必

要はなかつた。けれども腹は立つた。また例の兄らしい所が出て来たと思つた。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考えていた。少なくとも大学の教授ぐらいだろうと推察していた。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値をもっているだろう。兄の腹はこの点において、父と全く同じものであつた。けれども父が何もできないから遊んでいるのだと速断するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰つまらん人間に

限るといった風の口吻こうふんを洩もらした。

「イゴイストはいけないね。何もしないで生きていようというのは横着りょうけんな了簡だからね。人は自分のもっている才能をできるだけ働かせなくつちや嘘うそだ」

私は兄に向かつて、自分の使っているイゴイストという言葉の意味がよく解わかるかと思き返してやりたかった。

「それでもその人のお蔭かげで地位ができればまあ結構だ。お父とうさんも喜んでるようじゃないか」

兄は後からこんな事をいった。先生から明瞭めいりょうな手紙

の来ない以上、私はそう信ずる事もできず、またその口に出す勇氣もなかった。それを母の早呑み込みはやのこでみんなにそう吹聴ふいちやうしてしまつた今となつてみると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなつた。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の口の事が書いてあればいいかと念じた。私は死に瀕ひんしている父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹たいもとの夫だの伯父おじだの

叔母おばだのの手前、私のちつとも頓着とんじやくしていない事に、

神経を悩まさなければならなかつた。

父が変な黄色いものも嘔はいた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「ああして長く寝ているんだから胃も悪くなるはずだね」といった母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。兄と私が茶の間で落ち合つた時、兄は「聞いたか」といった。それは医者いしやが帰り際に兄に向つていった事を聞いたかという意味であつた。私には説明を待たないでもその意味がよく解つていた。

「お前ここへ帰つて来て、宅うちの事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかつた。

「お母さん一人じゃ、どうする事もできないだろう」と兄がまたいった。兄は私を土の臭においを嗅かいで朽ちて行つても惜しくくないように見ていた。

「本を読むだけなら、田舎いなかでも充分できるし、それに働く必要もなくなるし、ちようど好いいだらう」

「兄さんが帰つて来るのが順ですね」と私がいっぱした。

「おれにそんな事ができるものか」と兄は一口ひとくちに斥しりぞけた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしよう

という気が充ち満ちていた。

「お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどつちかで引き取らなくつちやなるまい」

「お母さんがここを動くか動かないかがすでに大きな疑問ですよ」

兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後あとについて、こんな風に語り合った。

十六

父は時々囁語うわごとをいうようになった。

「乃木大將のぎたいしやうに済まない。実に面目次第めんぼくしだいがない。いえ私もすぐお後あとから」

こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味が悪がった。なるべくみんなを枕元まくらもとへ集めておきたがった。気のたしかな時は頻しきりに淋さびしがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室へやの中うちを見廻みまわして母の影が見え

ないと、父は必ず「お光みつは」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起たつて母を呼びに行つた。「何かご用ですか」と、母が仕掛しかけた用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何もいわない事があつた。そうかと思うと、まるで懸け離れた話をした。突然「お光お前まえにも色々世話になつたね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前にきつと涙ぐんだ。そうした後ではまたきつと丈夫であつた昔の父をその対照として想おもい出すらしかつた。

「あんな憐れあわれつぽい事をお言いだがね、あれでもとはずいぶん酷ひどかったんだよ」

母は父のために箒ほうきで背中をどやさされた時の事などを話した。今まで何遍なんべんもそれを聞かされた私と兄は、いつもととはまるで違った気分で、母の言葉を父の記念かたみのように耳へ受け入れた。

父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言ゆいごんらしいものを口に出さなかつた。

「今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。

「そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好し悪しだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父おじに相談をかけた。伯父も首を傾けた。

「いいたい事があるのに、いわないで死ぬのも残念だろうし、と行って、こつちから催促するのも悪いかも知れず」

話はとうとう愚図ぐずぐず愚図ぐずになつてしまつた。そのうちに昏睡こんすいが来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思ひ違えてかえつて喜んだ。「まあああし

て楽に寝られれば、傍はたにいるものも助かります」と
いった。

父は時々眼を開けて、誰だれはどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻さっきまでそこに坐すわっていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とでき
て、その明るい所だけが、闇やみを縫う白い糸のように、
ある距離を置いて連続するようにみえた。母が昏睡こんすい状
態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかった。

そのうち舌が段々纏もつれて来た。何かいい出しても尻しり
が不明瞭ふめいりょうに了おわるために、要領を得ないでしまふ事が多

くあつた。そのくせ話し始める時は、危篤の病人とは思われぬほど、強い声を出した。我々は固より不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかつた。

「頭を冷やすと好い心持ですか」

「うん」

私は看護婦を相手に、父の水枕みずまくらを取り更かえて、それから新しい氷を入れた氷嚢ひょうのうを頭の上へ載のせた。がさがさに割られて尖り切とがつた氷の破片が、囊ふくろの中で落ちつく間、私は父の禿はげ上あつた額はすれの外はすれでそれを柔らかに抑おさ

えていた。その時兄が廊下ろうかづた伝いにはいつて来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空あいた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並なみの状袋じようぶくろにも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧ていねいに糊のりで貼り付けはてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしん

だ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐ふところに差し込んだ。

十七

その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私わたくしが厠かわやへ行こうとして席を立った時、廊下で行き合つた兄は「どこへ行く」と番兵のような口調で誰すい何かした。「どうも様子が少し変だからなるべく傍そばにいるようにしなくつちやいけないよ」と注意した。

私もそう思っていた。懐中かいちゆうした手紙はそのままにしてまた病室へ帰つた。父は眼を開けて、そこに並んで

いる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯うなずいた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。

「どうも色々お世話になります」

父はこういつた。そうしてまた昏睡状態に陥った。

枕辺まくらべを取り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中の一人うちが立って次の間まへ出た。するとまた一人立った。私も三人目にととうとう席を外はずして、自分の室へやへ来た。私には先刻さっきふところ懐

へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があつた。それは病人の枕元でも容易にできる所作しよさには違ちがひなかつた。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息ひといきにそこで読み通す訳には行かなかつた。私は特別の時間を偷ぬすんでそれに充あてた。

私は繊維の強い包み紙を引き搔かくように裂さき破やぶつた。中から出たものは、縦横たてよこに引いた罫けいの中へ行儀よく書いた原稿ようこう様のものであつた。そうして封じる便宜のため、四よつ折おりに畳たたまれてあつた。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。

私の心はこの多量の紙と印気インキが、私に何事を語るの
だろろうかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が気
にかつた。私がこのかきものを読み始めて、読み終ら
ない前に、父はきつとどうかなる、少なくとも、私は
兄からか母からか、それでなければ伯父おじからか、呼ば
れるに極きまつていふという予覚よかくがあつた。私は落ち付い
て先生の書いたものを読む気になれなかつた。私はそ
わそわしながらただ最初のページ一頁を読んだ。その頁は
下しものように綴つづられていた。

「あなたから過去を問いたただされた時、答える事ので

きなかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまふ世間的の自由に過ぎないのであります。したがつて、それを利用できる時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸いつするようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘うそになります。私はやむを得ず、口でいふべきところを、筆で申し上げる事にしました」

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のためにか書かれたのか、その理由を明らかに知る事ができた。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす気遣いきづかはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執とることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる気になつたのだらう。先生はなぜ私の上京するまで待っていていられないだらう。「自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知

るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。私はつづいて後あとを読もうとした。その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声が聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を馳かけ抜けるようにしてみんなのいる方へ行つた。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟した。

十八

病室にはいつの間にか医者^{いしや}が来ていた。なるべく病人^{びにん}を楽にするという主意^{しゆい}からまた浣腸^{かんちやう}を試みるところであつた。看護婦^{かんごふ}は昨夜^{ゆうべ}の疲れを休めるために別室^{べつしつ}で寝^ねていた。慣れない兄^{あに}は起^たつてまごまごしていた。私^{わたくし}の顔を見ると、「ちよつと手をお貸^かし」といったまま、自分^{おのれ}は席^{せき}に着いた。私は兄^{あに}に代^かつて、油紙^{あぶらがみ}を父^{ちち}の尻^{しり}の下^{した}に宛^あてがつたりした。

わした。私は先生の手紙をただ無意味に頁ページだけ剥は繰ぐつて行つた。私の眼は几帳面きちようめんに枠わくの中に箆はめられた字画じかくを見た。けれどもそれを読む余裕はなかつた。拾い読みにする余裕すら覚束おぼつかなかつた。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳たたんで机の上に置こうとした。その時ふと結末に近い一句が私の眼にはいった。

「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」

私ははつと思つた。今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結ぎょうけつしたように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。そうして一枚に一句ぐらいつの割で倒たかに読よんで行つた。私は咄嗟とつさの間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字もんじを、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安否だけであつた。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であつた。私は倒たかまに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてく

れないこの長い手紙を自烈た^{じれつ}そうに畳んだ。

私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行つた。病人の枕辺^{まくらべ}は存外^{ぞんがい}静かであつた。頼りなさ^{たよりなさ}そうに疲れた顔を^{おもて}してそこに坐つてゐる母を手招ぎ^{てまね}して、「どうですか様子は」と聞いた。母は「今少し持ち合つてるようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯^{うなず}いた。父ははつきり「有難う」といつた。父の精神は存外^{ぞんがい}朦朧^{もうろう}としていなかつた。

私はまた病室を退^{しりぞ}いて自分の部屋に帰つた。そこで

時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。私は突然立って帯を締め直して、袂たもとの中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者にの家へ馳かけ込んだ。私は医者から父がもう二、三日保つだろうか、そこを判然はつきり聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者はいにくは生憎留守であつた。私には凝じつとして彼の帰るのを待ち受ける時間がなかつた。心の落ち付おきもなかつた。私はすぐ俵くるまを停車場ステーションへ急がせた。

私は停車場の壁へ紙片かみぎれを宛あてがって、その上から鉛

筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであつたが、断らないで走るよりまだ増しだろうと思つて、それを急いで宅うちへ届けるように車夫しやふに頼んだ。そうして思い切つた勢いきおいで東京行きの汽車に飛び乗つてしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂たもとから先生の手紙を出して、ようやく始めからしまいまで眼を通した。



こころ中 - 両親と私 -
夏目漱石 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「こころ」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年2月25日第1刷

1995（平成7）年6月14日第10刷

初出：「朝日新聞」

1914（大正3）年4月20日～8月11日

※ 誤植の修正は「漱石全集」岩波書店を参照しました。

※ 底本は、物を書える際や地名などに用いる「マ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：伊藤時也

1999年7月31日公開

2004年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ